



瀬田の丘

創刊 1973年

編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部
東京都世田谷区瀬田 4-16-1



今日のみことば

年間第6主日 C年(2022年2月13日)

瀬田教会主任司祭 小西広志神父

第一朗読：エレミヤ書 17章5—8節

第二朗読：コリントの信徒への手紙一 15章12、16—20節

福音朗読：ルカによる福音書 6章17、20—26節

三つの分からないこと、三つの分かること

三つの朗読から

第一朗読にある「人間に信頼し、その心が主を離れ去っている人」(5節)に注目してください。ヘブライ語には「人」を表す表現がいくつかあるようです。5節での「人間」はアダームだそうです。これは、土から生まれ土へと帰っていく者としての人間を表すことばです。同じ節の「人」はゲヴェルだそうです。これは力ある者としての人間存在を表します。そうしますと、5節の意味は「土に帰るはかない存在である人間に信頼し、神さまの力を拒否して、おのれのままだに生きる人間に頼り、心が神さまから離れ去っているにもかかわらず、自分自身を力ある存在だと思いこんでいる」そんな生き方をする人は無意味であり、呪われるというのです。

第二朗読では18節の「滅んで」を心に留めましょう。ギリシア語はアポツリューミです。他動詞では「滅ぼす、失う」の意味があり、自動詞では「滅びる、消滅する」の意味となります。新約聖書では文字通り、「殺す、滅ぼす」の意味で使われます。と同時に、自然のいのちの終わり(肉体の死)を越えて、神さまの救いを完全に失うことも意味するようになりました。つまり「永遠の死」の意味です。ザアカイの回心の物語の最後にイエスさまは「人の子が来たのは、失われたものを捜して救うためである」(ルカ19章10節)と言われました。ここでもアポツリューミが使われています。失われた人とは、神さまからの救いを失っている人であり、同時に神さまからの救いを必要としている人のことです。

ちなみに、脳卒中のことを医療関係者はアポるといいます。英語のapoplexyに由来することばですが、ギリシア語のアポツリューミと関係するのかもしれませんが。

福音朗読ではイエスさまの説教のことば「幸い」(20節)について深めてください。ここから、四つの幸いが続きますが、ギリシア語の原文は「幸いだ」(マカリオイ)が最初にきます。この点が日本語とは構文が違います。イエスさまのメッセージの最初のことばは「幸いだ」となります。「幸せだ」と理解してもよいでしょうし、「祝福されている」と理解してもよいでしょう。

説教

わたしは今日の福音にある「貧しい人々は、幸いである、神の国はあなたがたのものである」(ルカ6章20節)の意味がよく分かりません。ピンときません。腑に落ちないのです。ですから、『マタイによる福音書』にある並行箇所「心の貧しい人々は、云々」もよく分かりません。

いつでしたか、イシドロ・リバス師のミサの中で師が「幸い」について話してくれました。「イエスキリストの最初のことは『幸い』、つまり『Happy』だったのです。」という内容でした。それを聞いて、なんてこの方は心にもないことを話しているんだろうと思ったのを覚えています。なぜなら、リバス師の表情はお世辞にもハッピーには見えなかったからです。とても、苦しそうな表情でした。「幸い」とはいったい何でしょう。わたしには分かりません。

司祭になった頃、わたしどもの会の本田哲郎師と話していたら、師は「貧しい人は大切だ。」みたいなことを言われました。これも嘘くさいと思いました。なぜなら師の考える貧しさとは経済的な貧しさだったからです。そして、高みに立って話しているようだったからです。「貧しさにもいろいろあるだろう。」と反論しようとしたのですが、呑み込んでしまいました。「貧しさを生きるのは難しいものだ。」と師が正直に話してくれたら、少しは違っていたかもしれません。現在、貧しさは様々な姿でわたしたちの周りにあるのです。

いくら聖書の注釈書を読んでも「神の国」についての説明はよく分かりません。ローマで学んでいた頃、マリア論の教授であったステファノ・チェキン師が「神の国は説明し尽くせない。あとは体験するだけです。」と話しているのを聴いて、納得しました。しかし、その後で「マリアさまは神の国を生きられた方なのです。」みたいなことを言われて、また分からなくなりました。

しかし、「貧しさ」を聖フランシスコのように「無所有」に置き換えたら、なんとなく分かるような気がします。すべては神さまからいただいたものです。それを自分のものにしてはならないのです。「何ものも自分のものとしなさい」という生き方にあこがれます。最後は自分のいのちすらも、自分のものにはできないのです。

「幸い」を「祝福されている」と言い換えたら、なんとなく腑に落ちます。「主に信頼する人」(エレ17章6節)は祝福されるからです。どんなに苦しく、辛く、惨めでも、神さまは祝福してくださるといふ希望だけは持ちつづけたいからです。

「神の国」をイエスキリストの十字架と考えたら、分かりそうな気がしてきます。なぜなら、イエスキリストこそが貧しくなられた方だからです。その貧しくなられた方が、今日もまた祭壇の上で小さなホスチアになるまで貧しくなられるのは、貧しく罪深いわたしが「神の国」に迎え入れられるためだからと考えたら、なんとはなしにホッとします。

わたしは、今日の福音にある「貧しい人々」も「幸いである」も「神の国」もよく分かりません。ですから、無理やり理解するのではなく、この一節をそのまま心に入れるようにします。いつかこの「幸い」を生きている方に会わせていただけるでしょう。いつか「神の国」について分からせてもらえるときが来るでしょう。そのことだけは信じています。